

和泉式部日記「帥の宮からの便り」 指導メモ

●本文

帥の宮からの便り

(1) 夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、木の下暗がりもてゆく。築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとどめぬを、あはれと眺むるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすれば、誰ならむと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。

(2) あはれにももののおぼゆるほどに來たれば、「などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔の名残にも思ふを。」など言はすれば、「そのことと候はでは、馴れ馴れしきさまにやと、慎ましう候ふうちに、日ごろは山寺にまかり歩いてなむ。いと便りなく、つれづれに思ひ給へらるれば、御代はりにも見奉らむとてなむ、帥の宮に参りて候ふ。」と語る。「いとよきことにこそあなれ。その宮は、いとあてにけけしうおはしますなるは。昔のやうには、えしもあらじ。」など言へば、「しかおはしませど、いと気近くおはしまして、『常に参るや。』と問はせおはしまして、『参り侍り。』と申し候ひつれば、『これ持て参りて、いかが見給ふとて奉らせよ。』とのたまはせつる。」とて、橘の花を取り出でたれば、「昔の人の。」と言はれて、「さらば、参りなむ。いかが聞こえさすべき。」と言へば、言葉にて聞こえさせむもかたはらいたくて、何かは、あだあだしくもまだ聞こえ給はぬを、はかなきことをもと思ひて、

薫る香によそふるよりは時鳥聞かばや同じ声やしたると
と聞こえさせたり。

(3) まだ端におはしましけるに、この童隠れの方に気色ばみけるけはひを御覧じつけて、「いかに。」と問はせ給ふに、御文をさし出でたれば、御覧じて、

同じ枝に鳴きつつをりし時鳥声は変はらぬものと知らずや
と書かせ給ひて、賜ふとて、「かかること、ゆめ人に言ふな。好きがましきやうなり。」
とて入らせ給ひぬ。

(4) 持て來たれば、をかしと見れど、常はとて、御返り聞こえさせず。

●本文分析

① (S) 夢よりもはかなき世の中を嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月十余日にもなりぬれば、

木の下暗がりもてゆく。

② 築土の上の草青やかなるも、人はことに目もとどめぬを、

あはれと (S) 眺むるほどに、近き透垣のもとに人のけはひすればば、

誰ならむと思ふほどに、故宮に候ひし小舎人童なりけり。

③ あはれにももののおぼゆるほどに (S) 來たればば、

「などか久しく見えざりつる。

遠ざかる昔の名残にも思ふを。」

など（S）言はすれば、

「そのことと候はでは、馴れ馴れしきさまにやと、慎ましう候ふうちに、日ごろは山寺にまかり歩いてなむ。

いと便りなく、つれづれに思ひ給へらるれば、

御代はりにも見奉らむとてなむ、帥の宮に参りて候ふ。」

と（S）語る。

④「いとよきことにこそあなれ。

その宮は、いとあてにけけしうおはしますなるは。

昔のやうには、えしもあらじ。」

など（S）言へば、

「（S）しかおはしませど、

（S）いと気近くおはしまして、『常に参るや。』と問はせおはしまして、『参り侍り。』

と（S）申し候ひつれば、

『これ持て参りて、いかが見給ふとて奉らせよ。』と（S）のたまはせつる。」とて、

（S）橘の花を取り出でたれば、

「昔の人の。」

と（S）言はれて、

「さらば、参りなむ。

いかが聞こえさすべき。」

と（S）言へば、

（S）言葉にて聞こえさせむもかたはらいたくて、

何かは、（S）あだあだしくもまだ聞こえ給はぬを、

はかなきことをもと（S）思ひて、

薫る香によそふるよりは時鳥聞かばや同じ声やしたると
と聞こえさせたり。

⑤（S）まだ端におはしましけるに、

この童隠れの方に気色ばみけるけはひを（S）御覧じつけて、

「いかに。」

と問はせ給ふに、

（S）御文をさし出でたれば、

（S）御覧じて、

同じ枝に鳴きつつをりし時鳥声は変はらぬものと知らずや
と書かせ給ひて、賜ふとて、

「かかること、ゆめ人に言ふな。

好きがましきやうなり。」

とて入らせ給ひぬ。

⑥（S）持て来たれば、

（S）をかしと見れど、

常はとて、御返り聞こえさせず。

●予習プリント「訳出のポイント」 （教科書のページと行数が示してある）

【一九四ページ】

- 1 「世の中」 意味は？
- 1 「四月十余日」 季節は？
- 2 「木の下」が、なぜ「暗がりもてゆく」なのか。
- 3 「あはれと眺むる」 どのような思いが背景にあるか？
- 5 「遠ざかる昔の名残にも思ふを」とは、誰ガ、誰ヲ、どのように「思ふ」のか？
- 6 「言はすれば」 「すれ」文法的意味は？
- 6 「(コトハ) 馴れ馴れしきにや」
- 7 「山寺にまかり歩いて」 ①「まかり～」用法の確認 ②何のためか？
- 8 「思ひ給へらるれば」 ①「給へ」用法の確認 ②「らるれ」文法的意味は？
- 8 「(誰ノ) 御代はりにも (誰ヲ) 見奉らむ」
- 9 「あ () なれ → あ () なれ → あなれ」
- 10 「おはするなるは」 文法的意味は？
- 10 「昔のやうには、えしもあらじ」 ということか？
- 11 「(誰ガ、どこへ) 常に参るや」
- 12 「これ(←何？)(誰ガ、誰ノ所ニ) 持て参りて」
- 12 「(誰ガ、何ヲ) いかが見給ふ」

【一九五ページ】

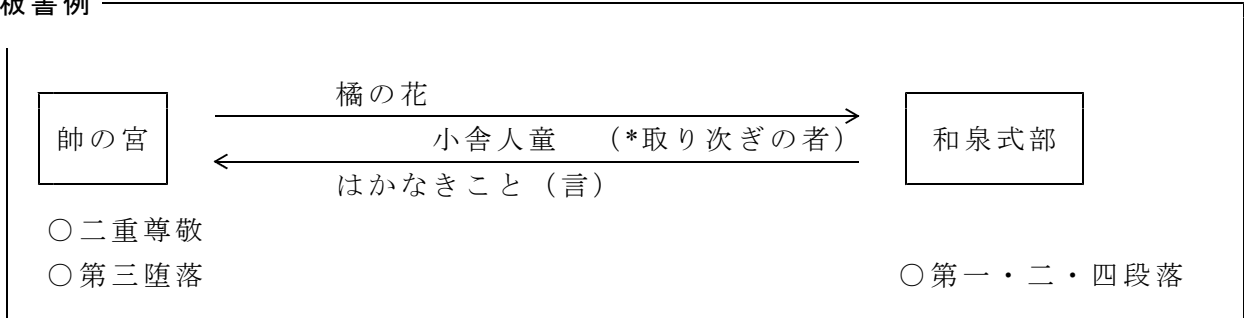
- 1 「昔の人」 誰カ？
- 2 「言はれて」 文法的意味は？
- 2 「(誰ガ、どこへ) 参りなむ」
- 2 「(誰ガ、誰ニ、何ヲ) 聞こえさすべき」 文法的意味は？
- 2 「言葉にて聞こえさせむも」 ①「む」文法的意味は？ ②ということか？
- 3 「何かは」 意味は？
- 4 「はかなきことをもと思ひて」 ①「こと」を漢字に直すと？ ②「と」の受ける範囲はどこからか？
- 5 「薫る香によそふる」 誰ノ、どのような行為を、こう例えたのか？
- 5 「時鳥」 誰ヲ例えたのか？ なぜ「時鳥」なのか？
- 5 「薫る香に～」の歌は、どのような思いを詠んだものか？
- 7 「(誰ガ、なぜ) まだ端におはしましける」
- 8 「(誰ガ、誰ニ、誰カラノ) 御文をさし出でたれば」
- 6 「同じ枝に～」の歌は、どのような思いを詠んだものか？
- 10 「ゆめ～な」 意味は？
- 12 「(誰ガ・何ヲ) 持て来たれば、(誰ガ) をかしと見れど」
- 12 「常はとて」 意味は？

●導入 1 全体像を捉える

Q 1 第一段落～第二段落を読んで登場人物と状況を整理する。

*和泉式部以外は本文から抜き出させる。

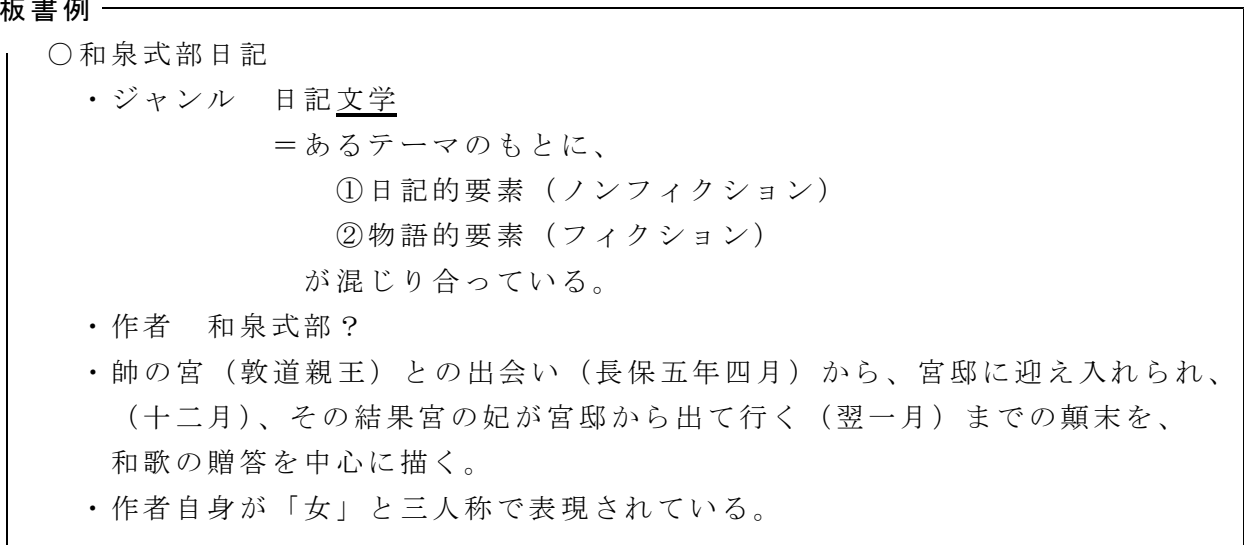
板書例



*実際には、第二段落に「『などか久しく見えざりつる。遠ざかる昔の名残にも思ふを。』と言はすれば」と使役の助動詞があるので、和泉式部と小舎人童の間をとりもつ侍女（取り次ぎの者）の存在がさらに想定されるが、それを見つけるのはこの段階では難しいので、次の授業時に見つけさせる。

- Q 2 さらに第三墮落～第四段落を読んで、「学習の手引き3」（この場面には、和泉式部が知ることのできない内容が書かれている。それはどの部分か。）を考えさせる。
- *第三段落だけ、帥の宮邸での出来事であることに気づかせる。例えば、地の文に尊敬語が登場するのは第三段落だけであり、そのことから、その主語が帥の宮であることを想定させるといったヒントを与える。以上の内容を上記板書例に書き加える。
- *この間をもとに、この作品と日記文学というジャンルの特色をまとめる。

板書例



●展開1 第一段落の読解

Q 1 和泉式部について思い出すことを挙げてみよう。

- *一年次に、小式部内侍が登場する「大江山」(十訓抄) や百人一首を扱っている。
- *それとからめて、以下の内容をごく簡単に紹介する。

- ①橘道貞 (和泉守・道長の家来) と結婚 長保元～5年
娘が小式部

②為尊親王（弾正宮） 長保2～3年（長保4年6月没）

③敦道親王（帥の宮） 23歳 和泉26歳

和泉式部日記の記事は長保5年4月～寛弘元年1月

寛弘4年敦道親王没（27歳）

④寛弘6年 彰子のもとに出仕

⑤藤原保昌（丹後守）と結婚

小式部も彰子に仕えていたが、28歳で母よりも早く没

○拾遺集

「暗きより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月」

○後拾遺

「黒髪の乱れも知らずうち臥せばまづかきやりし人ぞ恋しき」

「物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ見る」

「あらざらむこの世のほかの思ひ出でに今ひとたびの逢ふこともがな」

Q2 「なり」の識別を考える。

①「四月十余日にもなりぬれば」

②「築土の上の草青やかなるも」

③「誰ならむと思ふほどに」

④「小舎人童なりけり」

⑤「いとよきことにこそあなれ」

⑥「いとあてにけけしうおはしますなるは」

* 「動詞」「形容動詞活用語尾」「断定」「推定伝聞の推定」「推定伝聞の伝聞」とすべての用法が整理できる。

Q3 「四月十余日」は季節でいういつか。現在のいつ頃か。季節感が伝わる描写を、第一段落から抜き出ささい。

→夏 5月終わり頃 「木の下暗がりもてゆく」「草青やかなる」

Q4 「候ひし小舎人童なりけり」の助動詞と敬語を説明しなさい。

→「し」＝過去「き」の連体形 「なり」＝断定「なり」の連用形 「けり」＝詠嘆「けり」の終止形

「候ひ」＝謙讓語の動詞「～にお仕えする」、作者の故宮に対する敬意を表す

Q5 第一段落の現代語訳を確認する。

●展開2 第二段落の読解

Q1 「遠ざかる昔の名残」の「遠ざかる昔」「名残」とは何か？

→「亡くなった宮（との思い出）」 「余韻（思い出させるもの）」

Q2 「言はすれば」の文法的意味は？

→使役

* 和泉式部と小舎人童との間を取りもつ存在がいることが分かる。

Q3 「そのことと～候ふ」の小舎人童の発言から、敬語をすべて挙げ、その用法と敬意の方向について答えなさい。

* 第一段落の「候ふ」が謙讓語だったのに対して、この童の発言の中では丁寧語として使われているので、「候ふ」の用法を確認する。

* 「まかり歩き」、「思ひ給ふらるれば」が「自卑敬語」であることを確認する。必ずしもこの「自卑敬語」という語を使う必要はないが、現行の古典文法では、一般に謙讓語の扱いになりながら、聞き手に対する敬意を表す点に注意を促す。

なお、この自卑敬語は、平成 19 年の「文化審議会答申」（「敬語の指針」）における「謙讓語Ⅱ」に相当する。

板書例

○自卑敬語

= 対者（聞き手）に対して自己の動作をへりくだる表現。

例 1

×私は弟に申し上げました。（謙讓語Ⅰ＝弟に対する敬意でおかしい）

○私は弟に申しました。（謙讓語Ⅱ＝聞き手に対する敬意でおかしくない）

例 2

×私の別荘に伺います。（謙讓語Ⅰ）

○私の別荘に参ります。（謙讓語Ⅱ）

・古文では「給ふ（下二段）」「まかる」「まうで来」など。

謙讓語として扱われるが、聞き手に対する敬意を表す。

・訳は「～デス・マス」「～サセテイタダク」

Q 4 「昔のようには、えしもあらじ」の主語は？

→小舎人童

* 「前と同じようにはお仕えできないでしょう」の意。

Q 5 「しかおはしませど～のたまはせつる」の小舎人童の発言のうち、『』がついている部分の敬語をすべて挙げ、その用法と敬意の方向について答えなさい。

* 特に、「これ持て参りて、いかが見給ふとて奉らせよ。」の部分については、人物関係を丁寧に整理して内容を理解させる。

* なお、『常に参るや』と問はせおはしましては、

①「問は+せ（ソ）+おはし（ソ）まし（ソ）+て」となっている。

②「て」で主語が帥の宮から小舎人童に変わっている

と、原則通りになっていないところなので注意を促すとよい。

Q 6 「言はれて」の「れ」の文法的意味は何か？

→自発

* ここも「て」で主語が変わっている。

Q 7 帥の宮が「橘の花」を届けさせたのはなぜか？ それを考えるヒントとなる語句を、和泉式部が口ずさまずにはいられなかった和歌から抜き出しなさい。

→昔の人

Q 8 この場合「昔の人」とは誰か？

→為尊親王

- Q 9 「橘の花」に託した帥の宮の和泉式部に対するメッセージは何か？
 →兄のことを今でも思い出して懐かしんでいますか。
 ＊「橘の花（の香り）」が懐旧の情を催させるものであることを確認する。
- Q 10 「さらば参りなむ」の「参りなむ」を品詞分解しなさい。
 →「参り／な（強意）／む（意志）」
 ＊余裕があれば「なむ」の識別を確認する。
- Q 11 「いかが聞こえさすべき」は何を「聞こえさす」か。「（ 6字 ）に対する答え」の空欄に当てはまる六字を抜き出しなさい。
 →いかが見給ふ
 ＊小舎人童が帥の宮から与えられたミッションを再確認する。
- Q 12 「言葉にて」の「言葉」と対になる語句を六字で抜き出しなさい。
 →はかなきこと
 ＊「こと」は「言」で、「(ちょっとした)歌」の意。
 ＊身分の高い親王からの言づてに対して、和泉式部も言づてで対応するというのは失礼に当たるため、和歌で返事をすることにしたということ。男女の和歌贈答ではないが、男に和歌を返すことになる。そのため、「あだあだしくもまだ聞こえ給はぬを」宮だから、「何かは（構うものか）」と言いつつのようなことが書かれることになる。
- Q 13 第二段落の和歌の前までの現代語訳を確認する。

展開3 和歌「薫る香に～」の分析

- Q 1 句切れは？
 →ない
- Q 2 修辞は？
 →ない
- Q 3 構造上の注意点は？
 →倒置
- Q 4 「思い」（心情、感情など）が述べられているのは？
 →聞かばや
- Q 5 表面上は、何を「聞かばや」なのか？
 →時鳥（の声）
- Q 6 この歌で「時鳥」が登場する背景は何か？ 「時鳥」はどの季節の鳥だと思うか？
 →橘と時鳥は、万葉集の時代から夏を代表する取り合わせだった。
 ＊『古典基礎語辞典』（大野晋、角川学芸出版、2011）の「ほととぎす」の項
 ホトトギスのスは、ウグイス（鶯）・カラス（鳥）などのスと同じく鳥を意味する語。（中略）異名が多く、伝承も豊富である。ことに黄泉の国と往来できるという言い伝えがあり、死や不死をめぐる幻想的な世界とかかわりが深い。よく関係して用いられる橘・蓬・菖蒲などの植物も、それぞれが不老不死伝説や復活伝説における生命や霊力の象徴である。『万葉集』以来、夏の歌にホトトギスが占める割合は非常に大きい。中古の和歌の配列の習慣としては、まず藤に来て鳴き、そのあとに卵の花や橘にも行って鳴くものとされた。

- Q 7 イイタイコトとしては、何を「聞かばや」なのか？ 「時鳥（の声）」に隠された意味（比喩）は何か？
→ 帥の宮（の声）
* ここまでで、この歌の骨格が「あなたの声を聞きたい」であることが分かる。
- Q 8 「薫る香」は何の香り？
→ 橘の花の香り
- Q 9 「薫る香」に何を「よそふる（＝なぞらえる）」のか？
→ 「昔の人」＝亡くなった宮
- Q 10 和歌を現代語訳する。
→ 橘の花の香りに亡き宮様をなぞらえるよりも、（その橘との組み合わせが取り沙汰される）時鳥が（あなたが）同じ声をしているのかと、聞きたいものです。
* 和歌は必ずしも現代語訳する必要はないが、この歌は訳を難しくする修辞もないので、訳を考えさせることが可能である。
- Q 11 この和歌に託されたメッセージを簡潔にまとめるとどうなるか。
→ あなたの声をお聞きしたいものだ＝お会いしたいものだ。
- Q 12 この歌に対する返歌「同じ枝に～」には、どのようなメッセージが託されているか、まずメモをノートにまとめた上で、グループで話し合いなさい。
* グループワークをする際には、先ず各自の意見を考えてメモさせることがポイント。いきなりワークに入るよりも、すぐに有効な意見交換に入ることができて効果的である。また、ワークの際の司会役などをあらかじめ指名しておくこと、スムーズに議論を開始できる。

展開 4 第三～四段落の読解、和歌「同じ枝に～」の分析

- Q 1 「まだ端におましましける」の主語は？ なぜ「端におはしましける」なのか？
→ 帥の宮 小舎人童の帰参を待っていた
- Q 2 「持て来たれば」は、誰が、何を、どこにか。
→ 小舎人童が、帥の宮の歌を、和泉式部のもとに。
- Q 3 句切れは？
→ ない
- Q 4 修辞は？
→ ない
- Q 5 構造上の注意点は？
→ ない
- Q 6 「思い」（心情、感情など）が述べられているのは？
→ 知らずや
- Q 7 表面上は、何を「知らずや」なのか？
→ 時鳥の声は同じだということ
- Q 8 イイタイコトとしては、何を「知らずや」なのか？
→ 私（帥の宮）と兄の声は同じだということ。
- Q 9 「同じ枝に泣きつつをりし」とはどういうことか？
→ 同じ行動をしていた（同じ環境で育った）ということ。

Q 10 和歌を現代語訳する。

→同じ枝に鳴きながらとまっていた時鳥は（兄とともに暮らしてきた私は）、声が変わらないものであるとご存知ないのですか。

Q 11 この歌に託されたメッセージは？

→（例）あなたを思う気持ちは兄と変わらない。

*展開3のグループワークの結果を報告させながら、ここから以後の物語が展開し始めることを踏まえてまとめる。

板書例

- 「橘の花」のメッセージ（帥の宮→和泉式部）
→兄のことを思い出し懐かしんでいますか？
- 「薫る香に～」のメッセージ（和泉式部→帥の宮）
→あなたに興味があります。
- 「同じ枝に～」のメッセージ（帥の宮→和泉式部）
→（あなたを思う気持ちは）兄と同じです。

*生徒の発言を踏まえてまとめる。

Q 12 歌に対する和泉式部の評価と行動は？

→「をかし」 返歌はしなかった。

Q 13 「常は」から和泉式部のどのような心情が考えられるか。

→帥の宮に興味を持ちながらも、自分たちの今後がどうなるのか、見極めようとしている。

*このあと、宮は世間体を意識しつつ、和泉式部はためらいながらも和歌のやりとりが続けられ、二人の関係は深まっていった。